

2021 バレーボールミーティング Q&A (20210831 現在)

Q アメリカが勝てたことに、自国でのプロリーグが発足していたことは影響しているでしょうか？

A 主要な選手は国外のリーグで契約しているので直接的な影響は低そう

Q 皆さんへ：前回と同じ選手を多く入れていたのに、前回では少なかったミスが多発してしまったことに考えられる理由はありますか？同じメンバーなのに違ったことの原因について、ぜひご意見教えていただきたいです。

A 本大会前の調整不足

Q 中国のミスが多くなった原因は何なのでしょう？

A 決定率が低かったのは本大会前の調整不足と予想

Q 国際大会がほとんど実施されていない中、各国のネーションズリーグの戦い方は影響あったと思われますか？あまり外国チームの試合を観れていないのですが、例えば日本はネーションズリーグをほぼ固定メンバーで戦っていて、気になりました。

A 今年の VNL はイタリアのみで開催というこれまでと大きくことなる大会方式でした。感染のリスクもあって1ヶ月丸々同じメンバーで戦うチームは少なかったと思います。

Q 海外の充実した育成システムを日本に導入した場合、日本の順位を上げることは出来ると考えられますか？

A 可能性はあるかもしれません。

Q ボールが新ボールに変わったことにより、ジャンプフローターサーブが効きにくくなったような面は見られましたか？

A 以前のボールに比べると変化が少なくなっていると思います。その分スピードとコントロールで崩しているように見えました

Q 2019年ワールドカップでは、dedicate が主流に戻って来ていましたが、今回はどうだったように石丸先生は感じられましたか？

A webでの視聴でサイドライン側からの映像がほとんどだったため、明確にはわかりませんが、バンチ、リード、を原則に、セットプレーではおっしゃる通り積極的にデディケートを多く使用しているようには思えました。

これについては、2019年のW杯、ネーションズリーグ、と比較して、その割合に変化があったのかを検証する必要があるかと思っています。

Q ショートサーブでフロントゾーンを狙うことで失点となるサーブミスが目立っていた印象でしたが、ジャンプサーブと比べたときの効果率はいかがでしたか？

A あくまで印象ですが、フロントゾーンを狙ったサーブミス増加については、あまり気になるような数ではなかったように感じました。むしろ決勝戦のロシアは、ショートサーブを打てずにフランスのレセプションラインを揺さぶることができず、苦しんでしまったように思えます。これもあくまで私の印象ですので、この切り口でデータに基づいた検証が必要であると考えています。

Q オポジットに関しても右利きの選手がきわどいコースを打っている印象があり、利き手の有利不利は変わってきているのでしょうか

A 打球するポイントの違いという、利き手の特徴はあると考えています。有利不利というより、全てのポジションでその特徴をチームでどのように生かすか、が課題になると考えています。

Q 女子よりもトスが速かったというお話もありましたが、いかがでしょうか？

A 今回は時間も限られていたので、女子のオリンピックの試合をほとんど見ることはできませんでしたので、比較することはできませんが、同じコートサイズに対し、男子の方が体のサイズが大きく、反応速度（筋力の違いから）が速いことから、ディフェンス（ブロックとディグ）との勝負の観点でスペースを生むために、セットのスピードが女子より速いのは頷けます。しかし、あくまでスパイカーが高い打点で幅広いコースへ打つことができるセットであることを保証することが必須ですので、セットが速すぎても効果的ではありません。男子の場合、少しでも囷のスパイカーに反応してしまったら追いつけない程度のセットスピード、を保っていたように思いましたし、あくまで相手ブロッカーの移動する力や高さのレベルに合わせたセットスピードにとどめることが必要である、と考えています。したがって、女子の方が男子ほどセットスピードを上げる必要がなかったのではないかと考えています。

Q 現在の日本の御家芸とは、何でしょうか？現状、今回の五輪でも通用しませんでした。

A 日本人だからこれが得意、というより、この選手はこれが得意である（特徴がある）という見方が必要かもしれません。グループでの対応というより、個別での対応、となっていくような気がします。あえていうなら、男子の場合、日本（特に石川選手）が、一番積極的にツーアタックやフェイクセットを使用していたと感じました（これもデータで検証が必要ですが）。また、さまざまなローテーションからスタートしていたのも、日本の特徴であったと考えます。となると、場面や相手に対して、柔軟に対応できることが、日本の強みであると考えてもよいかもしれませんし、そうでないと世界とは戦えないとも考えます。

Q 利き腕に依存しないポジション起用や選手のオールラウンダー化に伴い、フロントオーダーが流行る可能性はありますか

A 「利き腕に依存しないポジション起用や選手のオールラウンダー化に伴い、フロントオーダーが流行るのではないか」のご指摘後に、フロントオーダーのレセプションフォーメーションについてシミュレーションしてみました。フロントオーダーの場合、ポジション3と6にアウトサイドが位置しますが、ポジション3にサウスポーの選手を位置した方がライト側の攻撃をより活かせるのですが、フロントオーダーの従来からの弱点であるS5においてのセッターのセット位置への移動の難しさ、が解消されませんでした。フロントオーダーを生かすには、レセプションが得意なオポジットが必要で、アウトサイドをレセプションから免除させることでS5のデメリットを解消できそうです。したがって、まだまだバックオーダーが主流であることは変わらないのではないかと予想しています。

Q エアフェイクは昔の日本も確かにやっていましたが、その「意味合い」は変わっていませんか？ 皆さんいかがお考えですか？

A おっしゃる通り、相手のブロックへの対応として出現した攻撃であると考えています。この攻撃は、ジャンプした位置から打球位置位置でスロットを変えることが特徴で、狙いはブロッカーの手の届く範囲のスロット以外で攻撃すること（または届くスロットであってもその上のスペースから攻撃する）、だと考えています。おそらく同時多発位置差攻撃に対し、相手サイドブロッカーがスプレッド、もしくはリリースすることが多くなったことで、ミドルブロッカーとサイドのブロッカーのスペースがやや開くようになった（そのように仕向けている？）ことが影響しているのではないかと考えています。しかしながら、webでの視聴でサイドライン側からの映像がほとんどだったため、ミドルが囷として攻撃に参加した場合などの相手ブロッカーの配置や反応についても、もう少し検証する必要もあるかと考えております。

Q 日本のミドルブロッカーの多くはレセプションに参加することが少ないことが多い傾向にあると思うのですが、今後ショートサーブの戦術が増えることが予想されるのであれば、ミドルの選手の守備力の向上も必要であるということでしょうか？

A ミドルブロッカーだけでなく、オポジットもレセプション技術が必要になると考えております。フロントゾーンへのショートサーブやエンドライン近くの強力なサーブなど、広いゾーンの守備が求められることから、レセプションの中心はあくまでリベロやアウトサイドのままでも、補助レシーバーとして、ミドル（ショートサーブに対して）やオポジット（強力なジャンプスパイクサーブを4人でレセプションする）のレセプション参加は必須になると考えております。またそうなることで、新しい戦術が生まれるきっかけとなる気がしています。

Q サウスポーの選手をレフト側で起用するメリットはなんですか？

A バックオーダーのポジション 2 で起用する場合、S1 でアウトサイドがライト側から攻撃する機会があります。S1 はどの国もサイドアウトを苦手とする傾向があるため、サウスポーである利点が最大限活かしやすくなるのではないかと考えています。その他、レフト側からの攻撃の際、ストレートのライン側のコースを狙いやすいのではとも考えていて、多くのチームがそのディグに、ディグの苦手な OP や、できれば 1 本目を触らせたくないセッターを配置していることが多い為、例えポイントにならない場合でもラリーを有利に進められる利点もあるのではないかと考えています。

Q 真ん中のバックアタックに対して複数人ブロックがつくケースが増えたように見えたのと、ブロッカーが真っすぐ飛ぶのではなく、身体を曲げてでもボールに向かってブロックに行こうという姿勢が見えたのですがどのようにご覧になりましたでしょうか？

A ご指摘の通りだと思います。確かに、ボールに対して体を大きく曲げたり腕を横方向へ伸ばしたりしていた場面が多くあったと思いました。他にも、ブロックした両手を V 字に広げる場面も多く見られました。V 字型のブロックについては、2005 年の一般研究発表（第 10 回大会）「バレーボールにおけるブロック面の研究について」（葛宗浩二氏）において、「腕をボールより狭く平行にするブロック面は、腕を V 字型に広げるブロック面より約 3 倍の成功ヒットがある」と報告されていて、その報告とは反対の傾向が見られたことに、私も大変興味深く、さらなる検証が必要であると思います。

Q 守備に関して、ブロックの時代だったのがレシーブ重視になっていきそうな気がするのですがいかがですか

A おっしゃる通り、ディグも大きなポイントであったと考えています。どのチームもリベロのディグ位置をバックレフトに固定せず、ブロックのシステムに合わせて、センターバックやライトバックに配置する場面が見られました。ブロックとディグの関係を駆使し、ディフェンス成功を目指す重要性が、これまで以上に大変大きくなっていると考えています。